



## UBERMORGEN.COM

feat. アレッシェンドロ・ルドヴィーコ vs. パオロ・キリオ

### 《GWEI - Google Will Eat Itself》

隠されたウェブサイトのネットワークに Google テキスト広告を提供することでお金を作り出し、そのお金で自動的に Google の株を購入する。つまり、先方の広告を利用して Google を買収する！ Google は自分自身を食いつぶすし、最終的に「僕ら」が Google を所有することになる！ この自動共食いモデルを構築することで、クリック数に基づく超現実的な経済モデルに転換させ、グローバルで新しい広告メカニズムを脱構築する。このプロセスが終了したら、「僕ら」が共有する Google 株を GTTP Ltd. (Google To The People 株式会社) に預け、そして GTTP Ltd. がそれをまた一般ユーザー（クリックする人々）に分配する。

Google の主な収入源の一つは、世界中のウェブサイトに無数の小さな Google テキスト広告を置く「AdSense」というプログラムである。「僕ら」は隠されたウェブサイトでたくさんの AdSense アカウントを作り、ユーザーがそのネットワークの中の一つのサイトに行くたびに、一連のロボット動作が引き起こされる。クリックごとに Google からの少額決済が行なわれ、月末に Google からその月の金額の小切手が届く。お金がたまったら次の Google 株を購入する。《GWEI - Google Will Eat Itself》は、完全な情報独占というグローバルで新しい広告システムの弱点を明らかにし、「新バブル時代」の復活を示すものである。事実 Google には、現在スイスのすべての銀行の総価値よりも高い価値が付けられている。

## UBERMORGEN.COM

feat. Alessandro LUDOVICO vs. Paolo CIRIO

### *GWEI - Google Will Eat Itself*

We generate money by serving Google's text advertisement on a network of hidden websites. With this money we automatically buy Google shares. We buy Google via their own advertisement! Google eats itself—but in the end "we" own it! By establishing this auto-cannibalistic model we deconstruct the new global advertisement mechanisms by rendering them into a surreal click-based economic model. After this process we hand over the common ownership of "our" Google Shares to the GTTP Ltd. (Google To The People Public Company), which distributes them back to the users (clickers) and public.

One of Google's main revenue generators is the "AdSense" program: It places hundreds of thousands of little Google text-ads on websites around the world. Now we have set up a vast amount of such AdSense-Accounts for our hidden websites. Each time someone visits a website within our network of sites, he/she triggers a series of robots. For each click we receive a micro-payment from Google. Google pays us monthly by check. As we collect enough money, we buy the next Google share. *GWEI - Google Will Eat Itself* is to showcase and unveil a total monopoly of information, a weakness of the new global advertisement system and the renaissance of the "new economic bubble" reality. Google is currently valued more than all Swiss Banks together.

まり、道路や生活空間においては、私たちの存在そのものが他者や環境に対して影響を与えていること、そして反転して自分も他者として影響を必然的に被っているということが重要だと感じましたが、そのように受け止めてよろしいですか？

ロバート——その通りだと思います。プロジェクトの開始当初は、実験的に、部屋が人を経験するということを考えていました。人と環境（部屋）のインタラクションとはいつても、人が環境を経験することができるようには計画されておらず、むしろ部屋のほうが人の動作によって変化したデータを受け止め、変化してゆく、ということを目指していました。しかし、参加している人も、デバイスの変化や環境の変化を体験できることがわかりました。もちろん、応答的ではないですが、どのようなものでも人の動作は必ず環境を恒久的に変化させています。それは、アナログの連続的なシークエンスにこそ反映されるもので、あなたが一度でも部屋に入れば、部屋から出たあとでもあなたの印象は痕跡として残り、環境に変化を与えているのです。これは、見ることはできませんが、日常生活において普遍的に行なわれている自己と他者を含む環境との関係の縮図かも知れませんね。

#### UBERMORGEN.COM

一九九九年、P2Pの創始者であるハンス・ベルンハ

——を、いかに道ゆく一般の人々が理解でき把握できるようにしてゆくか、ということなのです。Q Googleは、世界のあらゆる情報を包括的にアーカイブ化することを「コンセプトにすることで、管理的操作」という議論を棚上げしているように思われます。このようなイメージがある中《GWEI》は「鑑賞者」のようなメッセージを伝えていくのでしょうか？

アレクサンドロ——テクノロジとは、よく機能し

ルトとリス・フリックスによって結成。現在ヨーロッパのメディア・アートの中でも特に因習破壊的な表現を見いだしている。アレクサンドロ・ルドヴィーコはメディア評論家としての活動がアルス・エレクトロニカ賞のネット・ヴィジョン部門にて入賞。パオロ・キリオはウェブ開発者、製品マーケティング・デベロッパーのかたわらアーティストとして活動。Featuring...アレクサンドロルドヴィーコ、パオロ・キリオ、ハンス・ベルンハルト、リス・フリックス

#### UBERMORGEN.COM 《GWEI—Google Will Eat Itself》

Q UBERMORGEN.COMのメンバーにとって「コネクティング」とはどのようなものですか？

アレクサンドロ——主体と客体のあいだに意義のある関係性を築くことだと思います。異なる知の領域に属していると思われる対象を意図的につないでゆくこと。《GWEI》では、Googleの中心をなすビジネス（広告を、彼らの持つ公共のシェアの市場に連結させています。Googleの二つの



アレクサンドロ・ルドヴィーコ

ビジネス (Google AdSense) の周りで進化し、グローバルな「クリック—経済システム (click-economy-system)」を攻撃するでしょう。しかしこれは純粹に実験的なもので、ここにイデオロギーや政治的なメッセージはいっさい仄めかされていません。私たちはただ事実を用いることで、自己捕食 (auto-cannibalism) やグローバルなマスメディアの注視、そしていかに広告の姿をした寄生が寡頭支配的な巨人に関係しているか、というストー



パオロ・キリオ

決定的な経済的側面をショートさせることで、長期的なビジネス戦略を日常のたわいもない諸事へとつなげているのです。

パオロ——私にとって「コネクティング」とは、合理的な意味をなす関係性のことです。一点から他点への既存のコネクションを播さぶること、または新たなコネクションを作り出すことは私たちの周りにおける現実の光景や解釈を推移させます。アーティストである私にとって、このようにコネクションを操作することは、責任を負う必要のない「面白いゲーム」のようなものになってきました。

リス——UBERMORGEN.COMの作品でいう「コネクティング」とは、ポストモダン的な世界に妥当性のある問題を見つけること、そしてその問題を一般のユーザや人々の日常につなげてゆくことを意味しています。言い換えれば、ヴァーチャルな生活における重要で知的で複雑なテーマ——例えば銀行取引、市場調査、法律制度など

クリックによるコネクション」とそれらの取得可能性においてです。

パオロ——小さくも管理されている世界は、さらに極小な世界——P2P (peer-to-peer) やプログラムによる広範なネットワークによって立ち向かうことができると思います。メディア・アーティストは、このような革命のガードマンでありヒーローである必要があるのです。

# InterCommunication

季刊インターコミュニケーション

No. 59 Winter 2007

# 59

Feature

## Web X

来たるべき世界

ヴァーチャル・オンライン・ワールド  
クリエイティブ・commonsとマルチチュード  
ブログ、SNSの未来

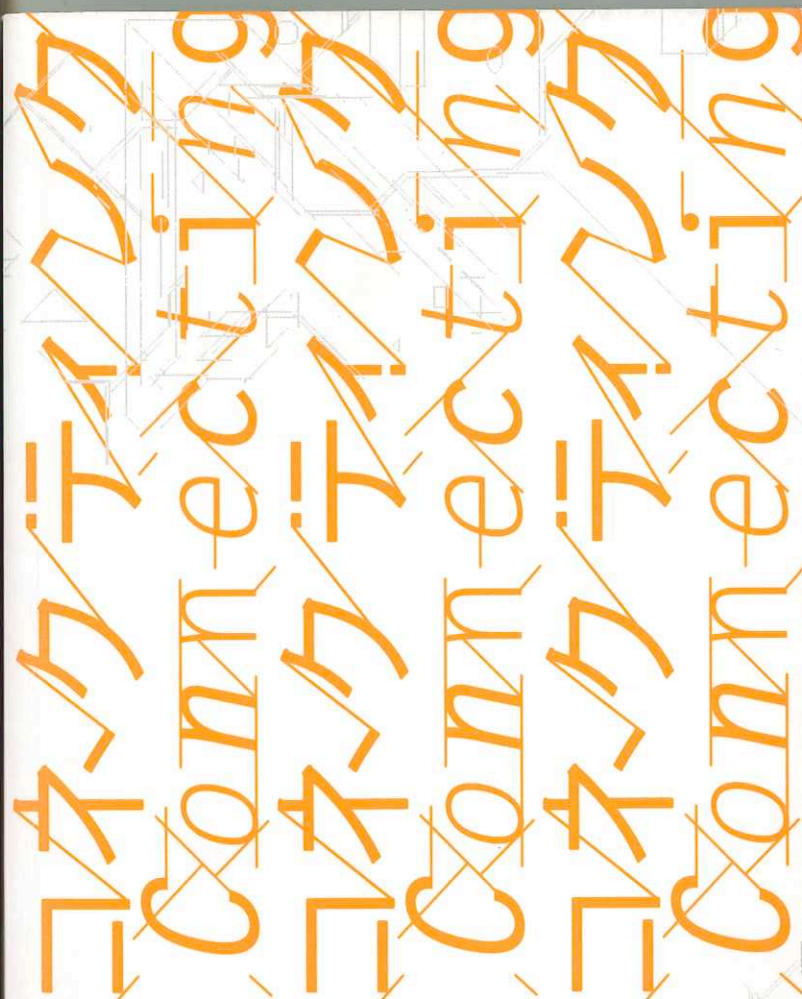
対談 山形浩生+鈴木健 **新しい社会の実験場としてのウェブ**

論考 ドミニク・チェン/佐藤俊樹/池上高志ほか

**知ったかぶりのあなたのための「Web Xキーワード事典」**

特別掲載 岡田温司 **芸術の自己免疫化を超えて**

連載 後藤繁雄/太田佳代子+AMO/田中純/稲葉振一郎



### コネクティヴな世界

—創造的コミュニケーションに向けて—